

# 臨時休業の経験を通じて見つめ直した、 自校の教育活動の「これから」

新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業中、学校はどのような指針の下、生徒の学びを支援したのか。そして、生徒の成長をどのように捉え、今後の教育活動に生かそうとしたのか。教育活動の再構築に向けて動き出した学校の取り組みを紹介する。

## 臨時休業中の生徒の成長を、 グランドデザインの見直しにつなげる

### 長野県蘇南高校

長野県蘇南高校は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業中、オンライン授業を実施するとともに、探究学習にも力を入れ、学校再開後は、臨時休業中の学びの成果を見取るために、評価手法を開発した。そして、主体的に学びを進めていた生徒たちの姿を受け、育成を目指す資質・能力の再定義に着手しようとしている。

### 開拓者精神の理念を基に グランドデザインを策定

長野県蘇南高校が位置する南木曾町は、県南西部にあり、かつて林業が盛んな地域だった。しかし、産業構造は変化し続け、地域はその中で自らの特色を模索している。そうした町にある高校としての教育方針を、小川幸司校長は次のように語る。「本校を卒業した後に地域を出るにしても、この地域に残るにしても、生徒には未来に向けて挑戦し続ける姿勢が欠かせません。本校の学校教育目標『開拓者精神の具現化』は、『未来を読んで、今をどう生きるかを考える』ことであり、新学習指導要領が目指す方向性とも重なりと捉えて

います」

そうした教育方針の下、学校教育目標の実現に向けたグランドデザインを2019年度に策定した。普通科、商業科、電気科を有していた流れをくむ総合学科の同校には、卒業後の進路として就職を志す生徒もいれば、国公立大学進学を目指す生徒もおり、希望進路も学力も多様な生徒が同じ校舎で学んでいる。そうした生徒一人ひとりへの育成を目指す資質・能力を、「自分を知る」「基本的生活習慣の確立」「課題解決力」「思考・判断・表現力」と定めた。加えて、同校には、小規模の小・中学校で過ごした生徒が多く、関係の中で育ってきた生徒が多く、岐阜県から越境入学してくる生徒な

どと新しい人間関係を構築することになるため、「コミュニケーション力」と「協働性」も、育成を目指す資質・能力として掲げた(図1)。

### 探究学習を通じて 学びの意味を考えさせる

グランドデザインに基づき、補習や個別指導などの手厚い学習指導を行ってきた同校の教師は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて臨時休業となることに、大きな不安を感じた。進路指導主事の楯和弘先生は、次のように語る。

「本校は学習支援において、生徒の学力に応じた個別最適化に力を入れるとともに、コミュニケーション

**長野県蘇南高校**

◎2019年度、「開拓者精神」の理念達成に向けて、ランドデザインを構築。多様な生徒が入学し、2年次以降は、「文理系列」「経営ビジネス系列」「ものづくり系列」の3系列のいずれかを選択し、専門的に学ぶ。

◎設立 1953（昭和28）年

◎形態 全日制／総合学科／共学

◎生徒数 1学年約70人

◎2020年度進路実績（現役のみ） 国公立大は、群馬県立女子大、新潟県立大、福井県立大、都留文科大学、長野大に5人が合格。私立大は、麗澤大、中京大、大谷大などに延べ16人が合格。短大、専門学校進学28人。就職22人。

◎URL <https://www.nagano-c.ed.jp/sonan-hs/>



校長  
**小川 幸司**  
おがわ こうじ  
教職歴32年。同校に赴任して1年目。

教務主任  
**西澤 博樹**  
にしざわ ひろき  
教職歴31年。同校に赴任して4年目。

進路指導主事  
**楯 和弘**  
たて かずひろ  
教職歴21年。同校に赴任して4年目。

総合学科主任・1学年主任  
**市瀬 利之**  
いちのせ としゆき  
教職歴20年。同校に赴任して5年目。



図1 長野県蘇南高校のランドデザイン



力と協働性を育むため、授業に對話を多く取り入れていました。臨時休業によって様々な制約が発生する中、どのように教育活動を推進していくべきか、手探りの毎日でした」

4月に小川校長が着任後、家庭のICT環境を調査すると、パソコンを所有していない家庭はあったものの、スマートフォンは全生徒が保有していた。そこで、準備が整った教科・科目から、オンライン会議ツ

ルや動画配信サイトを利用したオンライン授業を始めた。同時に、教育目標に掲げた資質・能力を育成するために、どのような教育活動を重視すべきか、教師間で対話を重ねた。

「学校に來られないからこそ、生徒には『何のために学ぶのか』『学んだことを将来にどう生かすのか』といったことをじっくり考えてほしいと思いました。そこで、自己のあり方・生き方を考えることにつなが

る探究学習への取り組みを優先し、教科の授業でも、知識の習得だけでなく、その教科を学ぶ意義の理解と、生徒自身のこれからの学習について考えるための振り返りを重視しよう」と話しました」（小川校長）

臨時休業中に実施した探究学習の内容は、次の通りだ。

1年生の「産業社会と人間」では、例年通り、「自分史」の作成に向けて、家族にインタビューし、その内容をまとめる「自分史カルテ」に取り組みませた。

2・3年生は、それぞれ1・2年次の「総合的な探究（学習）の時間」で行っていたグループ活動を、オンライン会議ツールを利用して継続させた。加えて、新型コロナウイルスも題材にした。総合学科主任の市瀬利之先生は次のように説明する。

「新型コロナウイルスに関するニュースを記録したり、感染拡大によって地域にどのような変化があり、その中で自分ができることは何かを考えたりする課題を出しました。こうした事態であるからこそ、社会の一員としての自覚を促し、視野を広げ、生徒が学びの意味を考えることを期待しました」

## それまでの探究学習の成果が 休業中の学習姿勢に表れた

臨時休業の開始当初は、自宅での学習に戸惑っていた生徒だが、次第に探究学習やオンライン授業にしっかりと取り組むようになっていった。市瀬先生は、自律的に学ぶ生徒を見て、1年次から探究学習に取り組みせてきた意義を改めて感じた。

「学校で他者とかかわり合いながら学びを進めてきた生徒が、学校から離れて自分で学習を進められるのにか心配でしたが、それは杞憂でした。1年次に『自分史』を見せ合ったり、グループで対話したりする自己開示を通じて、主体的に考え、発信する姿勢が身についていたのだと思います」（市瀬先生）

生徒の学びは、学校の枠を超えていった。小川校長は、臨時休業中の自主的な学びを表彰する「ブリーコラージュ（\*1）賞」を設けたところ、全校生徒の約4割が応募した。

「自由な発想で自分にできることを考えてほしいと思います、生徒に『今しかできない学びに挑戦しよう』と呼びかけました。すると、同じ中学校出身の1年生同士で故郷の美しい

春を収めた動画を作成したり、自分と他者の関係を見つめる小説を書く生徒がいたり、思い思いに自らの学びを広げていました」（小川校長）

全校生徒による主体的な取り組みもあった。それは、教師に贈られた「蘇南高校 先生方へ」と題したアルバムだ。「臨時休業中に先生方が私たちにしてくださったことに感謝を伝えよう」と、3年生有志の呼びかけに全校生徒が賛同し、学校再開後に取り組みたいこと、休業中の気持ちや教師への感謝の言葉など、一人ひとりがメッセージを綴ったのだ。職員会議でそれが読み上げられると職員室は大きな感動に包まれた。

## 臨時休業中の学びを 自己評価させ、意味づける

臨時休業中の生徒の成長をどのように見取るのかについても、教師間で議論した。教務主任の西澤博樹先生は、次のように振り返る。

「臨時休業中に出した課題で評価しようとしたのですが、生徒に電話をしたり、分散登校の際に声をかけたことで提出を促した課題は、やらさる感を含んだものです。また、学校

図2 「コミュニケーション英語Ⅲ」の「振り返りシート」

振り返りシート

科目名 コミュニケーション英語Ⅲ (b) 講座

記入日  月 日 年 組 番 氏名

この振り返りシートは、休校期間中の自分自身の取り組みを振り返り、自己の変化に気づくためのものです。成績評価の参考とするので、しっかりと記入して下さい。

1 単元の意義について

1-1 今回の単元の意義を理解することができましたか？その理由も記入して下さい。

単元	意義
①「語彙力の強化」 ②英語の読み方の習得	①知っている英単語をつぶし、読能力を強化する。 ②主語・補語の具体例・再主張の視れを把握する。

自己評価 4 できた 3 まあできた 2 あまりできなかった 1 できなかった

理由

2 自分自身の取り組みについて

2-1 課題に取り組み中でどこに苦めましたか？

2-2 課題に取り組み中でどこを工夫しましたか？

2-3 課題に取り組んで、分かったことやできるようになったことを記入して下さい。

2-4 課題に向き合い取り組むことができましたか？この課題を通してこれからの学習に對しどのような気が立ったかあなたは思いますが、記入して下さい。

自己評価 4 できた 3 まあできた 2 あまりできなかった 1 できなかった

\* 学校資料をそのまま掲載。

再開後すぐに定期考査を実施することも検討しましたが、知識の習得の確認に重きを置く考査も、臨時休業中に育んだ資質・能力を評価する方法としてふさわしくないのではないかという意見が出ました」

議論の結果、生徒が自身の学びを客観的に振り返る「振り返りシート」を、学校再開後に教科・科目ごとに記入させ、評価に用いることにした（図2）。全教科・科目共通の評価項目は、「単元の意義の理解度」「自分自身の取り組み」で、それぞれ4段

階での自己評価と評価の理由を記入させ、ほかに各教科・科目に応じた項目も設けた。また、全教科・科目の振り返りシートに、同シートの記入内容が成績評価の参考にされることを明記した。さらに、多様な強みを持つ生徒一人ひとりについて、育成したい資質・能力の「ミニマム」を考える機会とすることも重視した。

「どのように課題に取り組み、何を学んだのかを、自身で振り返ることとは、生徒の自己肯定感の向上につながります。私は、振り返りシート

\*1 文化人類学者クロード・レヴィ=ストロースが『野生の思考』で表した概念であり、「寄せ集めて自分で作る」「ものを自分で修繕する」ことを意味する。



の最後に『コロナ禍で学んだことが自分の未来にどう役立ちそうか、もしくはこれからの学習にどう役立ちそうか』についての考えを書く欄を設けました。それを基に、一人ひとりに育成したい資質・能力の具体的なありようを生徒とともに考え、丁寧な指導をしていこうと考えています。また、学習の振り返りは、平時にも必要です。各教科・科目で振り返りシートの改善を重ね、生徒の主体的な学習を支援するための評価ツールとして、今後も活用していきます」（西澤先生）

### 教師間の対話の積み重ねが 学校組織を強くした

同校が様々な取り組みに挑戦できた背景には、教師の対話の積み重ねがあった。それまでも、各分掌の主任から成る「主任連絡会」を週1回実施し、情報を共有してきた。臨時休業中は、学年主任も同会の参加者に加えて「拡大主任連絡会」とし、毎朝、校長室でその日に取り組む仕事の原案をつくり、ワーキング・グループ、分掌会議、職員会議の順に対話を進めた。

「4月には、1日かけて構築した内容が、感染拡大の状況によってその日の夕方には白紙になったことが何度もありました。しかし、先の見えない中で私たちが前に進めたのは、『対話による集合知』があったからです。対話で決まったことが覆ってしまうと、その対話は無駄だったように思えますが、生徒や教育への思いを共有したことは決して無駄ではなく、議論した内容が1週間後に役に立ったことが何度もありました。右往左往しながらも教師間で対話を重ねたことは、学校組織を強くしたと感じています」（楯先生）

小川校長は、緊急時こそ対話型の能動的な組織が必要だと強調する。「上意下達の組織では、意思決定は迅速ですが、学校を実際に動かすのは、生徒に近い教諭たちです。上位者である管理職が対話の原案をつくるにしても、担任の納得感が得られなければ、実践にはつながりにくいと考えます。本校では、私も含めた全教師で学校全体の方針を決め、活動内容を考え、実践状況を共有する対話を続けたことが、臨機応変な対応につながったのだと思います」（小川校長）



写真 7月中旬に2日間、在校生のみで文化祭が行われた。臨時休業中に取り組んだ『産業社会と人間』や『総合的な探究(学習)の時間』での探究学習の成果を展示。生徒は互いの作品に見入り、所定の用紙に熱心に感想を記入していた。

### 生徒の成長を 教育活動の見直しに生かす

今年7月の豪雨の際にも、数日間の休業を余儀なくされた同校だが、7月中旬の文化祭に向けて、生徒はSNSで連絡を取り合いながら着実に準備を進めた。文化祭のテーマは、「青春と一瞬」想像以上の自分へ。臨時休業中に取り組んだ探究学習の成果を展示(写真)し、小川校長から「プリコラージュ賞」の表彰があった。

生徒の成長は、数値にも表れている。「コロナ禍における『生徒の気づきと学びを最大化する』プロジェクト」(\*2)が5月中旬と6月上

旬に行ったオンライン学習に関する生徒アンケートを実施し、臨時休業中の生徒の状況を把握した。すると、同校の生徒の「困難に向かう力」「計画性」の肯定率が、2回目の調査で大きく伸びていた。また、「オンライン授業でも、教室と同じように授業を受けている感覚を持ち、友人ともコミュニケーションが取れている」ことへの肯定率も伸びていた。

そうした生徒の変容を踏まえ、育成を目指す資質・能力を、教師だけでなく、地域の人々や生徒と一緒に考え、さらに具体化して、自己評価できる仕組みを築いていきたいと、小川校長は考えている。

「世界全体を巻き込んだコロナ禍に直面し、教師も生徒も、真に社会に貢献できる思考力・判断力・表現力とは何かを考えなくてはなりません。それをより具体的に言語化することが重要であり、どのような教育活動で育成していくのか、教育のデザインが必要で、次年度に向けて、教師がアイデアを出し合いながら、育成を目指す資質・能力をアセスメントと連動させる評価改革も含め、本校の学びを再構築していきます」

\*2 臨時休業中の生徒の気づきや学びを最大化することを目指し、全国56校から主に中学校・高校の教師が参画し、互いの知恵を持ち寄りながら、毎週対話を重ねているプロジェクト。